

日本の風景

——「山高み川とほしろし」の系譜——

*木村紀子

(一)

「山高み 川とほしろし」という形で、万葉集には二つ用例を残すだけの「とほしろし」という語は、「ろ(呂)」の特殊仮名遣が乙類であり、甲類の「ろ」で表記された「白し」「いちじろし」等とは同類と考えられないという橋本進吉博士の提言以降、現行の多くの辞書・注釈書類は、おおむねこの線に沿った「雄大な・偉大な・広大な・大きい」といった解釈に落ちついている。ただし、これについては、村山七郎氏の、「とほしろし」の「と」の母音が乙類、文献上は甲乙の別のない「ほ」も本来は乙類とみられるところから、「とほ」と「しろし」とが結合して一語となれば、その「ろ」の母音も乙に転化する^①と考えられ、「とほしろし」はやはり「速顕(白)し」であるとすると批判がある^②。なお、村山氏は、意味のうえでは、「遠くまで輝りはえる・遠くまで顕著である」という意味が「雄大である」という意味に変化したとし、さらにそれは、もともと「トホ(遠)」と「オホ(大)」が起源上密接なかかわりがあるとみられることに由来するとしておられる。

単純明解な「山高み」に対して、「川とほしろし」の解釈が江戸国

学以来さまざまな議論を生んでいるのは、上古の用例が極端に少ないうえに日本書紀の「大小之魚」の「大」、石山寺藏大唐西域記の「人骸偉大」の「偉大」に「トホシロシ(ク)」の訓が残ること、中古の和文献にはみえないその語が、「長高く速白し」という歌論の重要な用語として復活していること等によるだろう。用例数が限られているうえに、川・魚・人骸・歌の象徴的気分など、およそ何の類縁性もないと思える対象に、他に何の限定詞もなく述語として何らかの様相的把握を示し、しかも現代は死語であるとなれば、用例から抽きだすしかないその意味は、結局普遍的なものにならざるをえない。「偉大」といって「雄大」というも、それらの概念を包括できる一語の素朴な意味となれば結局は「大」である。とすれば、それは「小」を意味する形容詞に対応し、「高し・低し」「速し・近し」「深し・浅し」といった反対概念を明確にでき、対象限定性の弱い、素朴で基本的な属性把握の形容詞の類に入るのがふつうである。しかし「とほしろし」はただちにその類の形容詞であるとは思にくい。

活用からみれば「とほしろし」はク活用形容詞である。万葉集の二例はどちらも終止形なのでそれだけからはク活用かシク活用か断定できないうえ、少くとも以後の用例では明らかにク活用をしている。とこ

るで、ク活用形容詞の語幹は、二音節を基本とし、一音節三音節のものも若干あるが、四音節以上になると、何らかの転成・合成的要因によって成立しているものに限られてくる。すなわち、「あきらけし・あざらけし・やすらけし」のような「けし」尾をもつもの、「あづきなし・おぎろなし・かたじけなし」のような「なし」尾をもつもの、「うら—わかし・ほの—ぐらし・あり—がたし・いさぎ—よし・おも—し—ろし・おと—だかし」のように明らかに二要素の合成になるもの三類に括られ、それ以外、四音節単独語根であるようなものは認められない。そこで、「とほし—ろし」もこの最後の類に入るとみられるのだが、「と—ほし—ろし」「とほし—ろし」という合成の切れ目を考えることは古代日本語として不可能であり、切れ目があるなら当然「とほ—し—ろし」ということになる。そして、村山氏も言われるように、少なくともその「とほ」は、「とほざかる」「とほながし」「とほづま」等の「とほ(速)」と同様であるとのみかた以外はできないし、また、「しろ」も、「ろ」の音韻の問題が解決できるとすれば、まずは「頭(白)」ということになるだろう。

ところで、「とほ(遠)」を語頭にもつ語は、「とほざかる・とほそく」のような動詞、「とほづま・とほと(音)・とほな(名)・とほひと・とほやま」のような名詞、「とほながし・とほどほし」のような形容詞など、いずれにしてもその「とほ(速)」の意味をそのまま明らかに生かして意味を形成している。中古以降の文献になってはじめて出てくる「とほあさ(浅)・とほぎき(聞)・とほかりがね(雁)・とほえん(縁)・とほよそ(余所)」等でも、いずれも「とほ(速)」の意味が顕わであり、その他たとえば日本国語大辞典(小学館)収載のどの語をみても、下接語と合体して「遠」の意味から転じた新たな意味を展開しているものはみあたらない。もともと下接語は、「とほ」の

ク活用形容詞語幹的性格からして、まずは名詞、そして動詞から転じたいわゆる居体言、および若干の動詞のままのものであり、それらで表わされた対象概念にいわば逆述語的な意味をもって「とほ」が冠せられている。それは、「とほ」に限らず、同様な形容詞語幹を語頭に持つ語の一般的な意味形成のあり方である。したがって、名詞・動詞に比べてより抽象的な形容詞の概念を、そのままさらに別の形容詞で限定するようなことは、言葉の根ざす素朴な日常の直観の世界ではありにくく、下接語に形容詞がくることは論理的にも考えがたい。ひとつの対象にかかわって、形容詞的判断を重ねようとする場合、しょせん「神さびて 高く貴き」(万 三二七)「松が根や 遠く久しき」(同 四三二)「たまきはる 現の限りは 平けく 安くもあらむを」(同 八九七)等と、二つの形容詞的把握の並列的な重畳にならざるをえないのである。数少ないク活用形容詞語幹を重ねた例である現代語の「細長い」「甘辛い」などが、いささか熟さない形であるが「長い」「辛い」と倒置できるのも、やはり、上接・下接どちらにも意味の主体が片よらず、並列の関係で合成されているからである。唯一の例外ともいえる「薄暗い・薄汚い・薄甘い・薄鈍い」等、比較的自由にク活用形容詞に接頭する「うす—」は、本来の「薄い」という形容詞の意味からはややずれた副詞的意味合で接している。「とほし—ろし」のかかわりでせひ触れておかねばならない万葉集だけにみられる「とほながし」にしても、「ふじの嶺のいや等保奈我伎山路をも」(万 三三五六)「天地の いや遠長久 偲ひゆかむ」(同 一九六)「はふ葛の いや遠永 よろづ世に 絶えじと思ひて」(同 四三三)と、いずれも時間空間的に「とおくながい」のである。とくに時間的な意味の後二例などにおいて、「いつまでも・とわに」といった熟した意味のように感じられるのは、我々にその語に対するリアルな語感が

ないために、時間自体のすぐれて抽象的心理的なあり方からおのずと導かれる意味にすぎない。

以上のことから、「とほしろし」の「とほ」が「遠」以外の語根要素としては考えられないということとともに、その意味は、「しろし」が活用形容詞の「頭(白)し」であるなら、「とおくしろし」といった並列的なあり方が、「しろし」が「頭(白)し」とは別のものであるなら、その「しろし」の意味を「遠」で限定するあり方が成立しているともみることができよう。ク活用の「頭(白)し」とは別の「しろし」については、「遠白」という歌学書での用字、「コムアヲニノウチ水干ニ夏毛ノムカバキ、マコトニトラ白クテ」(愚管抄 六)等からは考えにくいのであるが、さきにも述べたように万葉集の用例からは活用のあり方は不明であり、その時点ですでに「山高み川とほしろし」という慣用的な固定をしているむきもあり、中古和文においては常用語ではなかったようであるところから、歌学書等の用例が、万葉集の例をク活用と解釈して用いたとみる余地も残されているわけである。推測に推測を重ねることははばかれるが、ちなみに次のような「しろし」であるともみることが可能ではないだろうか。

「いきどほろし・よろし」という形容詞が上古からあるが、この「——ろし」の「ろ」は乙類である。また、「高殿を 高知りまして」(万 一六七)「この山の いや高知らず」(同 三六)のように「たか」というク活用形容詞語幹と「しる・しら(ろ)す」とが結合して、山や宮や大君の述語となる語があるが、この「しろす」の「ろ」も、「しろしめす」の用字からしてやはり乙類である。このことから、「とほしろし」の「しろし」も「しる」という動詞との何らかのかかわりでもとらえることができるのではないだろうか。ただしその場合、「しろし」——「しろし」と対応する動詞出自のシク活用形容詞の終止形か、

「しらす」の連用中止形「しろし」かは、「山高み川とほしろし」という唯一の形からは何とも決めがたい。しかしいずれの場合も、あたかも「山高知らす」に対応するかのような「川が遠くまで(野を)領じている」ありさまの把握にかかわって意味が成立することには相違がない。「とはそく・とほみ・とはあるき」等、「とは」の下接語が動詞ないし居体言のものは、「遠くに・遠くより・遠くまで」等の補語的な意味で下接語の意味とかわるのである。

「しろし」をどのような性格の語とみるにしても「とは(遠)」の意味を「とほしろし」から欠落させることは、以上述べてきたような語構成・意味構成のあり方からは考えられないだろう。したがって、橋本博士が従来の解釈を二説に集約された「大なり」と「あざやかなり・さやけし」のどちらにも私は疑問をもち、「遠方まではっきり見える」「遠目に見てもはっきり見える」という折口信夫博士の解釈に集約される説をとりたいと思う。「山・川」と対置され、「山」についての褒辞的な様相把握が単純素朴に「高し」であるのに対し、「川」のほうは「雄大である」というのでは、いささか次元のちがうような異和感をもってしまふのは私だけだろうか。その異和感がどこに根ざすかは、「川」が、万葉集で人々にどのような姿として見られ歌われているかを示すことによって明らかにできるだろう。

(二)

数ある川を詠んだ万葉集の歌は、その内容からまずは単純に、実生活とのかかわりで詠まれたものと、自然観照的なあり方で詠まれたものとの二大別することができる。むしろ、万葉集の場合、実生活から自然観照かを截然と二分することには問題があまりに多いのであるが、両者の渾然としたあり方やそこからまるる神事的要素については、本

稿の目的にかかわる範囲で、要に応じふれるに止めたい。

まず、明らかに実生活と密着して川が詠まれているものには、「松浦川の瀬光り鮎釣ると」(八五五)「川隅の屎鮎はめる」(三八二八)「鰻をとると川に流るな」(三八五四)などの魚をとる、「宇治川に生ふる菅藻を川速み採らず来にけり」(二二二六)「我が刈りて笠も編まなく川のしづ菅」(二二八四)などの菅・藻等を採る、「川速み曝さず縫ひし吾が下衣」(二二二五)などの布を曝す、「川上に洗ふ若菜の流れ来て」(二八三七)「この川に朝葉洗ふ兒」(三四四〇)などの洗いのものをする、「佐保川の水を寒き上げて植ゑし田を」(二六三五)のような灌漑、といった日常の生業にかかわるものと、「夏の夜は道たづたづし舟に乗り川の瀬ごととに竿さしのぼれ」(四〇六二)など舟での往来、「百敷の 大宮人は 船並て 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る」(三六)「飛鳥川なづさび渡り来しものを」(二八五九)など舟や徒歩での渡り、「上つ瀬に 打橋渡し 淀瀬には 浮橋渡し」(三九〇七)など橋を架ける、といった交通にかかわるもの、その他「檜隅川に馬とどめ馬に水飼へ」(三〇九七)「古郷の明日香の川にとみそぎしにゆく」(六二六)などがある。

おそらく、川と人々の実生活とのかかわりは、こうして歌に詠まれている以上に、多岐にわたり密接だったのであろう。そして、そこを省みれば、つぎのような川への美辞褒辞も、単なるほめ歌としての形式以上の実感が、底にひびいてるように思われるのである。

- (1) やすみしし 吾が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 たぎつ河内
 に 高殿を 高知りまして……………ゆき副ふ 川の神も大御食に 仕へま
 つると 上つ瀬に 鶴川を立ち 下つ瀬に さでさし渡す 山川も 寄り
 てまつれる 神の御代かも (三八八)
- (2) やすみしし わご大君の 高知らず 吉野の宮は たたなづく青垣隠り

- 川並の 清き河内そ……………その山の いやますますに この川の 絶ゆる
 ことなく 百敷の 大宮人は 常にかよはむ (九二二)
- (3) ……明日香の 旧き京は 山高み 川とほしろし 春の日は 山し見
 がほし 秋の夜は 川しさやけし (三二四)
- (4) ……山並の よろしき園と 川並の 立会ふ里と 山城の 鹿背山の
 まに 宮柱 太しきまつり……………(一〇五〇)

(1)・(2)は吉野離宮、(3)は明日香故京、(4)は久邇京の、それぞれ宮ばめ的な表現であるが、これらからすすんで、さらに観照的態度で川を詠みこんでいる多くの歌が、実生活とじかにかかわりあう「川」にみられる多様性に対し、かなり単純な表現類型に括られてしまうことは、万葉集の一つの位置を示唆している。

すなわち、まず川というより川の水への関心から、その静的なあり方の把握として出てくる詞が、(2)・(3)にもみられる「きよし」「さやけし」である。これらは、「山高く、川の瀬きよし」(二〇五二)「山見れば 見のともしく 川見れば 見のさやけく」(四三六〇)というように、山のほめ詞に対する端的な川のほめ詞であり、川固有の形容詞ではないにしても、川の静的なあり方をいう形容詞は、「とほしろし」をひとまず措けば、ほとんどこの二語に極まるということが出来る。「とほしろし」に、本居宣長以降「さやけし・清浄なり」とする解釈があるのは、これらの例から、「山は高く」「川はさやけし」であると、この表現の類型が導かれ、そこからおのずと育まれた語感にもとづいた直観的意解として出てきた側面もあるだろう。なお、「さやけし・きよき」は、「いざ率川の音のさやけさ」(一一二二)「川近み瀬の音ぞきよき」(二〇五〇)などの例にみられるように、見た目の清浄だけでなく、耳にふれてのそれでもあった。

ところで、そうした川の音とは、「石ばしりたぎち流るる泊瀬川」

(九九一) という流れの速さと相伴っているのだろうが、そのような動的な流れゆくものとしての水のあり方の描写を、つぎの表現類型としてあげることができる。そして、「吉野川ゆく瀬のはやみ」(一一九)「松浦川の瀬はやみ」(八六一)のような「瀬はやし」、「雨ふればたぎつ山川」(三〇八)「川の瀬のたぎつを見れば」(二六八五)のような「たぎつ」、「宇治川の水なわ逆巻き」(二四三〇)のような「さかまく」、「痛足川川浪立ちぬ」(二〇八七)「吉野川川浪高み」(二七三二)のような「川浪たつ」、「落ちたぎち流るる水の岩にふれ淀める淀に」(二七一四)「松浦川七瀬の淀はよどむとも」(八六〇)のような「よどむ」といった表現からは、概して、川幅はあまり広くなくて流れは速く、それゆえ岩かげや浅瀬には淀もできる日本の川のあり様がうかびあがってくる。「鴨川の後瀬静けく」(二四三二)「明日香川下濁れるを知らずして」(三五四四)などは、それらの中ではきわめて例外的なとらえ方であるといえよう。

万葉集における「川」は、そのほか「蝦鳴く甘南備川に影見えて今か咲くらむ山吹の花」(一四三五)「ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き河原に千鳥しは鳴く」(九二五)「河の上のゆつ岩むらに草むさず」(二二)などに代表される動植物や岩などとかかわって詠まれるものも多くみられるが、総じて「きよし・さやし」以下にみえてきたものは、耳目に映る折々の川の変化の相に応じたものであり、川的全体的な姿というより局所局所のありありとした息づきへの関心で歌われたものである。そして、川全体の姿や川の本性というべきことにかかわっては、結局、山々から「帯」のように長く蛇行して流れ出で、さまざまの変転をみせながらも「絶ゆることなき」ものといった単純な譬喩的表現に求めるしかないのである。

(5) 大君の御笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ(一一〇二)

- (6) 三諸の神の帯はせる泊瀬川水脈し絶えずは吾れ忘れめや(一七七〇)
 (7) 石ばしりたぎち流るる泊瀬川絶ゆることなくまたも来て見む(九九一)
 (8) 泉川ゆく瀬の水の絶えばこそ大宮処うつろひゆかめ(一〇五四)

万葉歌人の川への情感は、大きく広々として豊かに流れゆくというようなところでははたらかなかったようである。「度会の大川」(三二二七)「山川をひろみあつみと」(四〇九四)といった用例はあるが、前者は「おほやまと・おほみけ」等の「おほ」と同様な観念的な美称であるし、後者は「山や川が幾重にも広く厚く国土を成している」といった意味であり、一筋の川についての形容ではない。

さて、以上の万葉集における川への関心の検討から、ただちに「川とほしろし」の解釈がひらけるわけではない。ただ、さきの(3)にあげた「山高み川とほしろし」を含む歌が、山部赤人が「神岳」に登って作ったとなっていて、今一首の「天さかる 鄙にしあれば 山高み 川とほしろし 野を広み 草こそ繁き」(四〇一一)という例が、対になっている。「野を広み草こそ繁き」からしても、やはり広々と野を見はるかす視点が設定されているとみられることを考えると、「川とほしろし」が高みから眺めた川の、帯のように長く野をぬって流れてゆく全体的な姿をとらえての表現であるとみてよいだろう。「山高し」が、垂直的な視点の伸びひろがり志向し、「高知らず」意識を反映するのに対して、「川とほしろし」は、「遠くまで」かがやき流れてゆく川に沿った水平的な視点の伸びひろがり——奥ゆきの感覚に対応するとみるのが自然ではないだろうか。そしてそこに、「山高み川とほしろし」が、単なる山と川の姿の描写であるに止まらず、おのずからその山と川とで限定される空間の豊かな広がり、「絶ゆることなき」時間的志向をも詠みこんで、国ほめびびきも出してくるのである。「山川」や「山水」という詞が、「自然」や「風景」という抽象

的な詞にとつて代られるまで、具体的な山や川であるとともに、それから個別的存在を根柢から支え、そこに端的に集約される自然や風景を指してきた日本語のありかたは、単にもとの漢語としてそうであったというにとどまらず、「山高み川とほしろし」などにもすでに予定されている。

「とほしろし」の解釈に「雄大な」という語が用いられるようになったのは比較的最近のようである。(契沖以来の「大なる」「大きい」と「雄大な」は語感のうえでかなり違う。我々日本人は形容詞の類を結局は極めて微妙な語感の違いによって使いわけているはずである。)
 「山高み川とほしろし」を含む二首の歌は、それぞれ後続句に「春の日は 山し見がほし 秋の夜は 川しさやけし 朝雲に鶴は乱れ 夕霧に 蝦はさはく」(三三四)「鮎はしる 夏の盛りと 鳥つ鳥 鵜飼がともは ゆく川の 清き瀬ごととに 雉さし なづさひのぼる」(四〇一一)という川の細部描写がつづくが、このことや、この章でみてきたさまざまな川と実生活とのかわり、瀬々をたぎち流れる水へのもっぱらの関心などを、「雄大な」川というイメージでどう包みうるのか、私は疑問に思う。

(三)

(9) 白雲とみゆるにしるしみよし野の吉野の山の花盛りかも

是こそはよき哥の本とは覚え侍れ。させる秀句もなく、飾れる詞もなけれど、姿うるはしく清げにいひ下して、長高くとをしるき也。(無名抄)

(10) 余所にのみ見てややみなん葛城や高間の山の峯の白雲

始めの哥は、姿清げにとをしるければ、高間の山殊に叶ひて聞ゆ。(同)

(11) 前参議忠定

風体遠白くめつらしき様なり。玉川の里の明がたに垣根つづきなる卯

の花とやいふべからむ。

有家

風体遠白、姿おほきなるさまなり。雪つもれる富士の山をみる心ちなむする。

前宮内少輔光経

風体すみたるをさきとして、遠白くあはれなるさまなり。月は入方ちかく空清くのどけきにゆふつけ鳥の遙かなる声きく心地なむする。

(統歌仙落書)

中世歌論における「遠白」の解明は、「川とほしろし」の解釈以上に容易ではない。ともかく、どちらとも我々の語感ではすぐにはとらえがたく、用例もきわめて限られているために、万葉集の「川とほしろし」の解釈に歌論の用例を以てし、歌論の「遠白し」の解明に万葉集の例を用いるといった堂々めぐりにもなってしまう。歌学用語にもとづくきわめて象徴的な気分を、我々の多分に分析的な論理で説明しても仕方がない面もあるだろうが、「川とほしろし」の系譜をたどるために、たしかかなところからはいってゆくこととしたい。

まず、歌論の「遠白し」が、しばしば「長高くとをしるし」と続けで用いられることがあるように、万葉集の「山高み川とほしろし」を直接継承した用語であることは明らかだろう。しかしそのことは、「とほしろし」が万葉集以来延々と、日常語にせよ歌語にせよ実用されてきて、そうしたリアルな語感をふまえたうえで歌論中に用いられたというだけでは必ずしもない。「とほしろし」の解釈において、今鏡や愚管抄の例がひかれることはあるが、それ以前の和文文献には用例がみあたらないのである。ただ、歌論において、「遠白」と漢字が宛てられているところからは、少くともその時点では、語としての一般的な意味は「遠く白い」「遠目にしるく」といったあたりでとらえられ

ていたと推察できる。「遠白し」をいう歌論中比較的初期のものであるはじめにあげた用例において、「白雲・卯の花・雪つもれる富士」といった文字どおりの「白」が、その歌や譬喩の中に出てるのは偶然ではないだろう。しかも、無名抄の歌では、それらがどちらも「よそ目」はるかに望まれたものとなっている。統歌仙落書の忠定の条の「卯の花は、「明がた」の薄明の中にしるくうかぶそれであるし、「ゆふつけ鳥のはるかなる声」の場合は、あたかも万葉集の「きよし・さやけし」が目に見るだけでなく耳に聞く音のそれでもあったのと同様に、はるかからたしかに聞えてくる「声」としてのしるさである。そして、「遠し」が、一般に空間的な遠さはるけさから、時間のうえで遠さはるけさに転じて用いられるように、「遠白し」においても、当然時間的なあり方を志向する場合が出てくることとなる。

(12) 天の戸をおし明方の雲間より神代の月の影ぞのこれる
 (13) ささ浪や因つみかみの浦さびてふるき都に月ひよりすむ

(12)は三五記に、(13)は愚見抄に、いずれも遠白体の歌としてあげられているものであるが、階々と澄む月影はるかなときの射程の中にとらえられている。もともと言葉の世界では、すぐれて心理的抽象的な時間概念は、より具体的な空間概念をあらわす詞で代行されることも多いのであるが、「遠白し」の場合それがさらに進展してほとんど純粹に「心」のあり方のみにかかわっても言われることは、三五記や愚見抄の同じ所へあげられたつぎの歌によってみることができよう。

(14) 岡のべの里のあるじを尋ねれば人はこたへず山おろしの風
 (15) 住む人もあるかなきかの山ならし蘆間の月のもるにまかせて
 (16) ほのほのと有明の月の月かげに紅葉吹きおろす山おろしの風
 (17) をぐら山しぐるる比の朝なく昨日はうすき四方の紅葉は

愚見抄が「遠白体ぞ猶不思議の体」とし、さらに「小倉山の歌は愚

詠の中にはすこしつかうまつれる」と言う(17)の歌などは、はてしなき昨日はてしなき明日へのはるかなときが今朝の一点の紅葉ばの色に見すえられているといえるだろうか。三五記は「遠白体は器量天性ならむが稽古としふりたらむ所に終によまるべき姿なり。」と至極の体であると語っている。

歌論の理念に深入りすることは本稿の目的ではなく、またいま、それができる用意もないが、ただ、たとえば、長高体ひとつに括られることもある高山体・遠白体の別は、それぞれ眼差しを「高く持す」「遠く持す」といったあり方の別とみることもできるように思う。眼差しは、「心」におきかえてもよいだろう。こうして歌論の「遠白し」は、その志向を時間へとひらきながら、はるかに遠く奥深いところにたしかにすえられた眼といった内観的な意味合をも出してくるのである。

(18) 雪ながら山木かすむ夕べかな
 ゆく水とほく梅にほふ里
 川風に一むら柳春見えて
 舟さす音もしるきあけがた

有名な水無瀬三吟の冒頭四句を、こうして連歌の様式からはずしーまとまりで見ると、歌がらや抒情の質のいちじるしい異なりにもかかわらず、万葉集の「山高み川とほしろし」の歌の場合と、詠まれた対象のとらえ方において、妙に似通っている面があることに気づく。すなわち、万葉集の場合、二章でも述べたように、「山高み川とほしろし」と全体の景を叙べたあとに、「朝雲に鶴は乱れ 夕霧に蝦はさはく」あるいは「往く川の清き瀬ごとく 霧さしなづさひのぼる」と、いわば折々の細部の様相がとらえられているが、水無瀬三吟の場合も、初め二句と後二句とで一見同様なあり方をしていいる。しかしながら、

万葉集の実景描写と異なり、「雪ながら山本かすむ夕べかな／ゆく水とほく梅にはふ里」が、「みわたせば山もと霞む水無瀬川」を意識しながらも、水無瀬の実景そのものから出て山と川とからなるイメージとしての一つの風景を志向していることは、言をまたない。そして、「ゆく水とほく」に表わされた奥ゆきの感覚が、その心的風景にのびやかな広がりをもたせて、山と里との遠近相映える構図をあざやかに成立させており、そこにはおのずと、歌学で醸成されたきわめて心的な「遠白し」の感覚もにのびてくるのである。言語表現におけるこのようなパースペクティブの伝統と完成が、絵画においては近代洋画の影響を受けるまで遠近画法を生まなかったということとどのようにかかわり合うのか不明であるが、雲や霞や霧の中のおぼろな遠近感が、そのまま西洋の遠近感と同じであるとみることにはできないといった視点もあるだろう。それについてはまたあらためて、雲や霞の言語表現において風景を考へることにより、手がかりをえることとしたい。

ところで、我々は子供の時分から、目の前の実景を写生するのでなく、落書き風に一つの風景を描く場合、しばしば二瘤駱駝のような山と、その山の間からS字風に蛇行して流れ出る川を描くことがあるだろう。それはまた、「兎追いしかの山／小鮎釣りしかの川」という小学唱歌から誰でもが心に描く風景、悪くいえば「名所土産の包紙にでも書かれてあるような、平凡な、お定まりの」風景ということでもあろう。しかし、二瘤駱駝とのびたS字の山川が、我々日本人の風景のイメージとして「お定まり」になったのはいつごろからであろう。これまでの言語表現のうえで見て来た限りでは、それは、万葉の昔からということになるのだろうか。ただ、そうした山と川が、これこそ日本の風景そのものだともいえる、どこにでもありふれた様相である一方で、つぎのような民話の中に出てくる描写をみれば、往古か

らの川と実生活との深いかわり、とりわけゆたかな流域での稲作とのかかわりゆえに、とおくのびひろがる川の風景が、ある種のユートピア的イメージを担っている側面にも、思いを致さざるをえない。

△三日月を見たことのない山間の村に住む種作さんは、年をとるにつれ、いっぺん山のむこうを見ておきたいと思い、ある日息子に背負われて峠に登る。V——うわあ何たら広いもんずらノ——峠の下にひろがっている盆地にはむこうの遠い山すそまでみわたす限り山んほがさやさと波うっている。その間を帯のようにくねくねと川が光って流れていた。(百田ばなし——信濃の民話——)

注

- (1) 『上代語の研究』——橋本進吉博士著作集 5——所収「とほしろし考」『辞書さまさま』
- (2) 古代語「とほしろし」と「の」とよびについて——『国語園文21巻7号』
- (3) 『日本語の語源』、『国語学の限界』
- (4) 用例の詳細は、注(1)や各注釈書、辞書類にあるので省略する。『口訳万葉集上・下』、『万葉集辞典』——折口信夫全集4・5・6——注(1)の見解が出される以前のものであるが、「辞書さまさま」では、この系統の解釈は根拠あまいとして否定されている。なお、ここで問題になるのは「大・偉大」の「トホシロシ」をどうするかだろうが、折口博士にはそこを包摂した「燦火を巨大(トホシロ)くする」という実用例(『霜及び霜月』全集15)がある。「遠目にしるし」大いなり」というところだろう。
- (5) 前田妙子『和歌十体論の研究』に詳しい。
- (6) 藤田正雄『歌の中の日本語』
- (7) 信濃の民話編集委員会『日本の民話 1』採集 牧内武司 再話 松谷みよ子

The Japanese Landscape in Verbal Expressions
—The Genealogy of '*Yamatakami Kafatōfosirōsi*'—

Noriko KIMURA

Summary

In this essay the writer considers the image of Japanese landscape consisting of mountain and river in our mind, through elucidating the meanings of '*yamatakami kafatōfosirōsi*' in *Manyōshū*, '*towoshiroshi*' in *Karon* (criticism of poem) in the Middle Ages and the other verbal expressions.